

烏山興野にある嵐除け地蔵様のお話をすっかんね。

むかあーし、むかあーしの事だがんなあ。儀助<sup>ぎすけ</sup>っていう大変信心深く、働き者のお百姓さんがいたんだと。

儀助は毎日、お地蔵さんに

「今日も一日お願いしやんす」

と、手を合わせていたと。

ある、あづーい夏が終わりかけの頃だんべな。おてんとうさんのあんべえ悪い日ばかりが続いていでよ。

「こんだあ嵐がやって来たらば、作物は全部駄目になっちまあ、飯も食うことできねえ」と、言いながら、儀助は流れる汗を手拭いでぬぐい、畑の中へしゃがみこんでしまったと。

それからどのくれえたったか、

「ぎすけー、ぎすけよー」

と、呼ぶ声に、汗をぬぐいぬぐい、声がする方へ行ってみたと。

するといつの間にか地蔵様へ来ていたんだとなあ。蝉<sup>せみ</sup>の声ばかりで辺りには、誰も居ねえ。思わず地蔵様の背中を見た儀助は、

「こりゃあすげえ。地蔵様の背中がまっかっかだあ」

と、ぶったまげてしまったと。

石ころでできている地蔵様が、

「嵐の前になると、私の背中がまっかになって、お前たちの畑を嵐から守ってやるぞ」

「いやあ、その声はまちげえねぐ地蔵様だ。果てさて、夢だったのがなあ」

なんて思いながら、儀助は空を見上げたど。

「ありゃあ、むごうのほうは嵐だとゆうのに、こっちはちっとも降ってねえぞ」

今度は畑の方へ飛んでいったと。

「畑もなんともねえだ」

儀助は、嬉しくなつて、この不思議な出来事を村のみんなにしゃべったんだと。

それを聞いた村人は、

「いやあいやあ、たまげた地藏様だあ。おらたちの嵐除け地藏様だ。ありがてえこった」と、言って、皆でありったけのごっそうを作ってよ、お供えをし、お念仏を申し上げたんだと。

今でも、土地の人は毎年三月寅の日に、近くのお寺より、お札を作ってもらって念仏を申し上げ、そして、竹の棹さおいっぱい餅をつけて、真ん中にお札をはさんでよ、「麦のふた」

と、言って、麦畑にさして、嵐除けにしているっていうことだ。

この間も、杖をついたばあちゃんが、お地藏様に手を合わせていたっけなあ。

おしまい